



連携事業をやって、みた

「織物 BAR in FUCHU」ができるまで

東京都・区市町村連携事業は、都内の区市町村が抱える課題や地域の状況に応じた文化事業を、東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)が連携して、実施するものです。府中市では2024年度に「共生社会を聞いて、みる」、2025年度に「共生社会にふれて、みる」を地域のNPOである特定非営利活動法人アーティスト・コレクティブ・フチュウ(ACF)と協働し、実施しました。「織物 BAR in FUCHU」は2年目に実施したものです。

市の担当は、この2年間のことを次のように振り返ります。

市の仕事をしていると、協働という言葉がよく使われます。

市民の方々と一緒にまちの課題に取り組むことだとは分かりつつも、いつも協働するって、どういうことなのだろう？と考えてきました。

連携事業をはじめたとき、正直に言えば、最初は戸惑いがありました。でも、ほんとうに協働するって、こういうことなんだなと思いました。

「織物 BAR in FUCHU」に至るまでには、何度も会議を重ね、現場を共に動かしながら、試行錯誤を重ねてきた道のりがありました。ここでは、その一端をみなさんにお伝えします。



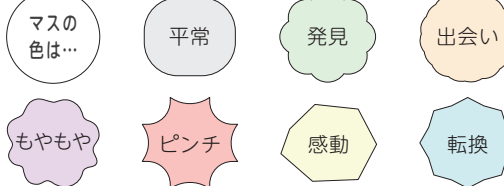
連携事業をやって、みた

「織物 BAR in FUCHU」ができるまで

すごろくで!

府中市は市長を筆頭に「共生社会」の実現に力を入れており、芸術文化を通して共生社会にどう取り組めるのかが今回のテーマになりました。ここでは、2年間にわたる連携事業の取り組みをまとめています。会議の議論はなかなか結論が出ず、遠回りしたことが何度もありました。様々な方々との出会いから新たな発見や驚きがあり、それらを活かすことで事業を進めてきました。一歩一歩ゆっくりとした歩みでも少しずつ前に進んできたこの2年間の道のりを、すごろくで表現しました。

東京都・府中市芸術文化連携事業は、市の課題意識をもとに予算負担は都、アーツカウンシル東京 (ACT) は事業全体のコーディネートを担当。また、当初から地域の事情に精通したアーティスト・コレクティブ・フチュウ (ACF) も事業の企画運営に参加し、4者の連携で実施しました。



ー 織物BAR とは？



美術家・彫刻家の久村卓が主宰するワークショップ。カウンターで好きな毛糸や布をオーダーし、手のひらサイズの織物をつくる。手作業をすることで、周りを見たり、話をしたり、様々なコミュニケーションが誘発される場が生まれる。府中では市内で不要になった素材を集め、創造活動に活用する「ラッコルタ-創造素材ラボ-」と連携し、閉業した洋裁教室や現役のアパレルブランドから提供された布を使った。



久村卓(美術家・彫刻家)

東京生まれ。多摩美術大学彫刻学科卒業。ハンドメイドやDIYなど、美術で周縁とされる素材や技法を選び、“台座的”なものをつくることで、ようやく制度的に成立する作品を制作する。国内外での展覧会多数。近年はワークショップやコレクティブでの活動も行う。



東京都・府中市芸術文化連携事業

主催：東京都、府中市、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
企画協力：特定非営利活動法人アーティスト・コレクティブ・フチュウ

東京文化戦略 2030 の「誰もが芸術文化に身近に触れられる環境を整え、人々の幸せに寄与する～人々のウェルビーイングの実現に貢献する」ため、生活の中での芸術文化活動が増えること、行政の様々な場面で芸術文化の活用を目指し、東京都が公益財団法人東京都歴史文化財団と共に、区市町村単独では取り組めない試行的な取り組みの支援を行っている。

連携事業をやって、みた

「織物 BAR in FUCHU」ができるまで
2026 年 3 月発行

編集：大川直志、佐藤李青(アーツカウンシル東京)

ロゴデザイン：杉浦一志

冊子デザイン・写真：高橋真美

材料提供：ラッコルタ-創造素材ラボ- より | 布：サトー洋裁教室、(株)F.F.P. | ダンボール板：多摩岡産業(株)

グラフィックレコーディング：清水淳子

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京



連携事業の詳細はこちらをご覧ください